

福祉系対人援助職養成の現場から

66

西川 友理

“すみあそび”

…普段墨を磨（す）ったり、筆でかいたりということをしないから、なんだか思うとおりにいきません。どの筆を使うといいかわからない。どの紙をつかうといいのかもわからない。薄くなったり、濃くなったり、想定よりずっとにじんで、思わぬところで急にかすれて、私の想定を含みながらも、好き勝手に紙に跡が残っていきます。

でも、なんだか気持ちいい。紙と筆と墨が出す想定外の姿に呼応するように筆を動かし、立ち現れてくる姿に驚き、楽しみ、またかいてみる。うまくいかなさというのは違和感の連続、でもその違和

感を持ったまま、次の一手を考える。

“すみあそび”と名付けられたこのワークで、ひとり禅問答のような時間が過ぎていきます。

先日、マガジン連載をされている櫻井育子さんの「アートプレイワーカー 養成講座」を3カ月かけて受講しました。4回のオンデマンド含むオンライン講座と、1回の対面講座です。オンライン講座では座学とそれに基づく参加者同士のZOOMでの対話、対面講座では櫻井さんがご用意くださった墨や筆で“作品”をつくり、その後、“展示・発表”して、その場にいる人たちに説明する、という

“すみあそび”をしました。

思ったほど、思うようにいかない。

…それにしても筆と墨というやつは、なかなか思い通りにいきません。想定していたことよりも、想定外のことがたくさんおきます。道具に慣れていたらそんなことないのかしら、と思っていたら、櫻井さんも「思ったとおりにいかない」ということがあるらしいです。ふーん、そういうものなのか…と思いつつ、想定外を楽しみます。

保育の場面でもそうです、子どもはこちらが想定していた範囲を軽々と超えて様々なことを表現します。まずは「あれっ」という違和感があり、その違和感とどう付き合っていくか、その違和感と共にある私でいると、子どもにもこちらの感覚が伝わるのか、どんどん面白いことが起こり始めます。

この連載の46号に書いた卒業生の言葉、保育が指導案通りに上手くいかない時にどうしたらいいと思う？という問いに対して卒業生が言った言葉を思い出します。

「思い通りにいかない、なんて当たり前じゃないですか！そんな時は、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、子どもに任せてしまいます。」

私が主催している親子哲学対話や当事者研究等の対話の場でもそうです。想定していた展開ではないところに話は進みます。何が答えかわからない、何が正解かわからない、だれも着地点をもっていない、どこにたどり着くかわからない、そういう場だからこそ、場を注意深く見て、聞いて、感じて、皆が皆に刺激されて場は発展し、考えはどんどん広がっていきます。

想定外と想定内

想定外が面白いからといって、あまり用意をしておかない、ということではありません。むしろ色々と想定して場の準備をしておきます。

例えば、時間を決めていたり、自傷他害の恐れがある事は制限したり、安心が脅かされるような要素は出来る限り排除したり、何をする場なのか、何を目指す場なのかを考え、ある程度の枠組みを用意しておきます。その場にいる人皆が出来るだけ自分らしく自由であるために、この場がどういう所かを考えておき、時にはその場を構成する人みんなに宣言しておく必要があります。

とて、そこに参加する子ども、大人、学生に、この枠組みについて、ギッチリ沿ってもらおうとはあまり考えていません。むしろ、その中で出来るだけ、自分らしくいてもらえるように考えた末の“場のあり方”であることを伝えます。

そういう準備をしっかりとしておく、きちんと作っておいた枠組みに「あれっ」という違和感が生じることがあります。枠組みの外、“想定外”に、何かが生じることが往々にしてあるのです。「あ、そんなやり方があるか！」「そんなこと考えていたのか！」「そうくるか！」などなど、豊かな展開が生まれます。

時には、講義もそうなります。私は対人援助職養成の資格に関わる科目を担当していますから、国から科目の内容について指定されています。指定されている内容は教えなければいけません。しかし「指定されている内容しか教えられない」のではなく「指定された内容さえクリアすれば、何を教えても、どんな教え方でもいい」と捉えると、出来ることは増えます。そういう気構えで講義を構成し、受講する人たちが出来るだけ自由に考えてもらえるような設定をすると、予期せぬ発言や、こちらが考えていた講義ではない展開になり、思わぬ方向に学びが発展していきます。

……などと、頭の中でいろんな思考を巡らせつつ、ひたすら、かきます。

“すみあそび” 発表の場

さて、墨と紙による、いくつかの作品が完成しました。会場内にそれらを展示し、自分が作った作品を皆で眺め、どん

な気持ちで作成したかを話す、“発表”をします。

櫻井さんは「発表する、とは、“伝える”ことではなくて、自分の表現を“差し出し”、世界と“分かち合う”ことです」とおっしゃいました。

私はこの発言について2点、「あっ」と思うことがありました。

一つは、「自己主張じゃなくて、自己表現なんだ」ということです。自分の意見を言うのでなく、自分の中からあふれた思いが形になった“表現を差し出す”、というかたちを体験することを重要視されていることが強く伝わりました。そして表現を分かち合う、という体験を十分にすることは、実は自己主張や意見表明をするための土台にもなると感じました。

もう一つは、「発表って、一方的なものでなく、双方向的なものなんだ」ということです。自分の中から出てきた表現を相手と分かち合う時に、“分かり合える”という経験をします。それはとても嬉しいものです。一方で何をどうしても“分かり合えない”“この人とは感覚が違う”ということも生じます。分かり合えないズレはいわば「想定外」です。想定外の何かが生まれるきっかけになります。相手とのやり取りの中でズレた隙間から、新しい発見、新たな発明が生まれます。分かり合えるから世界は整っていく、そして分かり合えないから世界は広がっていく…ということだと感じます。

アートプレイワーカー、とは。

一日たっぷり“すみあそび”をして、さて振り返ってみれば、あ、そうだ、この講座は「アートプレイワーカー養成講座」だったっけ、と思い出しました。

最初は、表現遊びをする場にいる大人として、何を用意するか、どう声をかけるか、子どもとどう接するか等のスキルを学ぶのかな、と思っていました。しかしそれよりもむしろ、違和感に注目し耳を澄ますこと、違和感を持ったままその場にいること、関係性の中で相手も自分も生成されること、拙速な結論ではなく問いと共にあること、表現することと主張することの違い…などを4回の座学と1回の実践を通して学びました。

櫻井さんのHPには、この講座について、このように説明されています。

「APW（Art Play Worker）養成講座は、人や場で起きていることを、自分自身もその一部として観察し、関係の中から生まれる変化や可能性を扱う実践です。心理学や発達理論、現象学などを手がかりに、違和感や身体感覚に耳を澄ませ、すぐに答えを出さずに問いとともにいること。そして、すみあそびなどの表現実践を通して、自分・他者・場が関係の中で生成されていくプロセスを探究します。」

場を作るひと、という立場上、どうしても力を持ってしまいがちな1人として（特に子どもがいる所で、大人や先生として存在するならなおさら！）、私自身がどうあるか、どう居るか、を学ぶ場に

なりました。

こんな気付きを、やがて子どもと共にある仕事に就きたいと考えている学生にも、体験してほしい。そのための仕組みってどうすればいいのかな…ゆっくりじっくり考えて、今後も様々に試行したいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・

※ところで、櫻井さんの「違和感」についての考察、めっちゃめっちゃ面白いのです。詳しくは本マガジン 65 号「現象学としての書道 #15」を読んでください！

<https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol65/47.pdf>

引用）櫻井さんの HP <https://ikuko-sakurai.com/>